



2005.11
No.5

特定非営利活動法人C.P.I. 教育文化交流推進委員会
発行所：C.P.I. スリランカ事務所
c/o Mahindarama Road, Etulkotte, Kotte, Sri Lanka

日本本部：東京都三鷹市中原2-16-9 Tel. 0422-49-3808
E-mail：cpi_mate@muh.biglobe.ne.jp
URL：http://www.cpi-mate.gr.jp

日本のC.P.I. 会員の皆さまにお願いします

教育里親を増やし、里子たちを支援してください

もっと、もっと多くの子らを支援して下さい

現在、スリランカでは里親のいない里子は約500人います。10年以上も日本経済の悪い環境が続いているため、止むを得ないことですが、里親さんが減ってしまったため、里子も減らしてきました。しかし、一所懸命勉強している子どもの中に、本当に貧しい家庭の子がたくさんいます。学校からもたくさん推薦がきます。私たちは、その中から選び抜いているのです。

どうか、この子らに希望を与えてください。

身近な方々に呼びかけていただき、少しでも多くの里親さんを増やしてください。



年度初めに支給される学用品

学用品の支援だけでなく、心のケアが必要です。

裕福でない子どもたちにとって、家庭の内外に心を痛める問題を抱えています。それらを解決してあげてこそ、学習に専念できることとなります。

今年の2月、C.P.I. との合同会議で「里子の生活指導と心のケアが必要」ということが議論されました。そのために、元C.P.I. の奨学生だった卒業生に「地域アシスタント」をしてもらうことを決めました。彼らは今の里子の先輩です。自分が里子だったころの辛い思いと反省を持っています。きっと彼らは後輩の良き指導者になり、相談相手になってくれると確信しています(このことは2ページに報告されています)



研修を受ける卒業生

支援内容の改善と充実を図ります。

里子の学習成果や生活の「里子報告」についても改善する方向で進めています。そして、里子の選出から生活指導など、質の高い支援を心がけて行きます。

次のことに重点をおいて支援して行きます。

- 学業への支援
- 健康・精神面のケア
- 親との面談
- 子ども成長報告
- 学校長との連携
- 図書の実践
- 実務教育支援
- 学校間交流

p.4~

津波被災里子救援報告

救援の様子と生活の近況を調査
たくましく復興に向けて始動する
現地の様子を報告します。



地域アシスタント制度スタート

教育里子たちの日常をもっと把握し、より深くケアできるように改善を図りたい。

卒業から10年、いよいよ元・奨学生が活動に参画！

C. P. I. とSNECCが活動を始めて18年の間、待ち続けてきたことがあります。それは、「「貧困層の中から教育里子として育ててきた人々」とともに活動を始める日」でした。

いま、かつての学生リーダーたちは、30才を過ぎ生活も安定し、活動を開始しました。

報告者 CPI会長 小西菊文

『スリランカの教育里子たちの日常をもっと把握し、より深いケアをしていきたい』この目標をもって、今年2月、C. P. I. 理事会は、「地域アシスタント制度」という具体案をSNECCとの合同理事会で提案しました。

そして、9月2日、コーッテ・センターに、元・奨学生(教育里子)の中から、参画希望者20名が集まりワークショップ(討議研修)を行いました。

彼らは、自らが教育里子であったときを思い出し、その頃の境遇と自分の未熟さから、自分の果たさなければならなかった義務を怠っていたことを反省していました。そんな反省をベースに後輩の指導が出来ることを願っています。

今回のワークショップ(討議研修)の鍵！ 『こどもたちの「チェンジ!」を助けよう』

日本の教育里親さんからC. P. I. 本部へのご連絡の中で、「なぜスリランカの子どもの手紙は内容が毎回同じなの？」とのご質問があります。

ワークショップ参加者に聞くと、つぎの答が返りました。「学生のときは、何を書いたらよいか分からなかった」「自分の変化が自分でもよく分からなかった」なるほど、そうなのですね。

C. P. I. の教育里子たちは、貧困ながら学業が優秀な、思春期の子どもたちから選ばれてきました。そういう子どもたちは、良くも悪くも毎日に変化の中にあるわけです。ですから、彼らが、自分に起きた変化を客観的にみていくことができるようになることが大切です。

そこで、地域アシスタントとして、これを助力する方法を3時間も話し合いました。大きな一歩が、踏み出されたのです。



参加者はみんな懐かしい顔・顔・・・

成長した卒業里子に会えることは、とても嬉しいことです！



熱心に小西会長の研修を受けるアシスタント候補者

地域アシスタントを中心に「互いに励ます輪」を広げる

地域アシスタントたちの最初の活動として、各地域センターに大きなボードを作り、教育里子一人ひとりが「自分や家族に起きたこと」をカードに書いて貼っていくよう指導していきます。地域センターに来るたびに、貼ったカードが増えるしくみです。

ほかの子どもたちに、「自分に起きたこと」を見てもらう、このような試みはSNECCでは初めてのことで他の国での成功例が具体的に語られました。

ワークショップ参加者たちは、『ほかの子どもたちに見てもらうことが大事』という意味を、すぐに理解しました。これは、素晴らしいことでした。

「ほかの子どもに、自分の“チェンジ!”を教えてもらえるということは、いいことだ。皆で友だちのことを喜び合えることは有意義だ」と言います。

彼らは、かつて貧困の中で悩みながら勉強を続け、成功を勝ち取った教育里子卒業者です。だから「励ましの輪」の意味を分かるのだと思います。

このような人々が、次々に、地域アシスタントに参画してくれることは、C. P. I. の活動の目標を達成する道であり、大いに助力していきたいと考えます。

地域リーダーとアシスタントの役割

SNECCには、全国に112の地区センターがあり、C. P. I. は教育里子活動としては、このうち90地域を受持っています。(C. P. I. 関連基金ULEFで受持っている、学用品供与のみのセンターもあります)

地区センター長は、C. P. I. - SNECCの教育支援の考え方を理解し、きちんと管理してくださる寺院のご住職が担ってくれています。依頼しているのは、

- ・貧困家庭でありながら優秀な思春期の学生を支援
 - ・対象の子どもを選考で情実や権威に流されない
 - ・子ども管理・親との面談・各種報告をきちんと行う
 - ・学校の継続情報は、学校長と連携をとりあう
- こういったことです。また、里子たちは、地域センターに、試験の結果や、補習授業の状況などを報告しなければなりません。遅れる子がいるのも事実です。

地域アシスタントは地域センター長の補佐として、ご住職ではなかなかケアしきれないことを、行

っていくことになります。その成果は、とても楽しみです。

日本側の担当者の適性が問われる

このプログラムで肝心なことがあります。それは、地域アシスタントたちへの配慮です。

彼らとともに活動し、彼らへの手助けを考えて、日本の中にきちんと発信できる担当者が大切になります。

アシスタントたちは、もちろん日常の仕事で忙しく、そして、まだまだボランティア活動の実費(交通費など)を余裕をもって自分で払えるほど裕福者ではありません。少なくとも交通費への配慮は大事です。

また、どこでも自由に動けるかといえば、そうではありません。例えば、スリランカでは、学校関係者以外の者は、たとえ卒業生でも簡単に学校内に入れないのです。C. P. I. とSNECCは、必要があるたびに教育省関係者と学校から、行動の許可を取る手助けをしなければならないでしょう。そのほか、様々に、地域アシスタントとおなじ目線で考え、解決を図らなければならないことがあります。

ですから、地域アシスタント制度を軌道に乗せていくためには、スリランカに長期に滞在してC. P. I. 事務所職員として満足いく働きができ、かつSNECC職員との良好な関係を続けられる人材が必要になります。

2004年8月にC. P. I. スリランカ事務所を登記して以来、長期のボランティア期間を経た上で、ようやく、担当者が決まるどころです。応援をお願いいたします。



まず上の10地域から。徐々に広げていきます。

津波被災のC.P.I.教育里子家庭への救援報告

寄付をいただいた皆さんに感謝いたします

C.P.I. 会長 小西菊文

多くの方々からのご寄付に感謝を申し上げます。C.P.I. 事務局は、昨年12月31日付けの緊急文書で、「C.P.I. の組織的救援は、教育里子家庭を優先する」とのお知らせを行い、SNECCに対して被災調査依頼を致しました。

その後、約1ヶ月の調査期間を経て、救援対象家庭および救援方法ならびに金額を決定し、募金のお願いを申し上げました。その結果、約500万円の寄付が集まりました。

ご寄付いただいた方の中には、復興後の子供たちのケアを心配してくださった方も多かったこと、寄付ご配慮をありがたく御礼申し上げます。

ここに、救援報告をさせていただきます。

なお、C.P.I. が第一次救援金として目標を立て送金した250万円のうち、予算では80万円を予備費としておりましたが、現在75万円が未使用となっております。協力団体SNECCでは、東部カルモニで住民協議施設を造る案があり、住民ニーズの調査中です。

また、当初募金依頼額を超えました250万円につきましては、現在C.P.I. の寄付預かり金となっております。こちらの使途もSNECCとともに検討中です。教育里子の地域あるいは学校からのニーズに応じて、復興に向けて有効に使用していきたいと考えております。みなさまに重ねての感謝を申し上げます。

津波被災救援は、このように進めてきました

方針

- (1) 災害当初、当会の日常活動から鑑みて、食料・医療等の緊急対処は無理と判断しました。よって、そのお気持ちの方には、日本赤十字社、スリランカ大使館を紹介いたしました。
- (2) C.P.I. の伝統として、緊急募金は使途目標を決めて行うことにしてきましたので、今回も救援対象となる教育里子家庭を決めてからの募金となりました。
- (3) ALテストの受験生で、勉強のノートを流された学生は、試験準備ができなくなりますから、他の学生が整理したノートをコピーして渡し、試験に備えさせることにしました。
- (4) 家屋の全壊あるいは半壊にあった里子家庭への救援は、状況を調査したところ、仮設住宅あるいは借家の手当てによりとりあえずの住む環境はあると判断し、政府からの支援策をみて、家庭ごとに最もよい救援を行うことにしました。
- (5) 学用品は、津波被災が『奨学用品配布』の直前でしたから、2003年の大洪水のときとは異なり特別の資金を必要としませんでした。配布できるところから順番に、奨学生認証を行い配布していきました。

実施

- (1) C.P.I. は、当初に決めた目標に沿った救援資金を2月24日に現地に送金しました。
- (2) SNECCでは、民間援助を受けた家庭への政府援助方針が決まらないため、家屋損壊した認められたため、8月11日に援助対象者に通知を行いました。詳細次のとおり。
 - ①全壊家庭へ 265,000ルピー(家財支援15,000ルピーを含む)を4家庭に救援しました。
 - ②半壊家庭へ 65,000ルピー(家財支援15,000ルピーを含む)を4家庭に救援しました。
 - ③家財消失家庭へ 15,000ルピーが、5家庭に救援しました。
 - ④亡くなったゴール地域の卒業里子のために見舞金が贈られました。

(1ルピーは約1.1円)

救援に対する近隣へのインタビュー

救援中の教育里子家庭の近隣で、声を聞きました。

- ①避難キャンプへの誘導、NGOや外国政府による仮設住宅建設の動きが早く、助かった。
- ②政府が、被災を受けていない地域からの食料供給をしたので、あまり困らなかった。飲料水の供給も早かったと思う。
- ③職が失われたのは痛い。この辺はホテルで働いていた人が多いので、早くホテルが復興し観光客が戻ってくれることを願っている。
- ④日本からの教育支援を受けていた家庭がその「つて」で復興救援を受けられるのは嬉しい。それぞれの家庭で様々な「つて」による救いの手が差し伸べられることは良いことだ。
- ⑤「津波の後、皆が部落のこれからを話しあっている。民衆にとって、新しいことが始まるように思う」。(スリランカ全体にコミュニティセンター造りが『新しい良い波』となっている)



近隣の人々にインタビューを行っている
C.P.I.インターンの工藤君



フランスのNGOが建てた仮設住宅(4万円ほど)

ようやく決まりつつある政府方針

余りにも多かった被災に対し、政府の救済方針は決まりかねていた。多くの国、団体、個人からの支援があり、その実態がつかめなかったためと思われる。

結局、家屋損壊の家庭には10万ルピーを支給する。民間の援助とダブっても、政府支給金の返還を求めることはしない、ことになった。しかし、今後の津波対策も絡んで、海岸線から100m以内に住んでいた人々の扱い(移動の是非)が、まだ決まっていない。ふたつの政策があり、11月の大統領選挙の結果で決まる予定。

救援中の全家庭を、C.P.I.事務局がモニタリング

C.P.I.からの救援対象を、つぎのように分けました。

- ①避難キャンプに住む家族:住居は仮設であるが、まずまず。避難地域でのトイレの状況は悪くない。元の土地への帰還時期が近いので、C.P.I.からの全壊復興救援 25万ルピーの対象となった。政府からの復興金10万ルピーも受けられる。
- ②海岸線100m以内に元の土地があるので、全壊した家の復興に未だかかれない家族:
仮設住居、あるいは借家に住んでいる。C.P.I.からの全壊復興救援 25万ルピーの対象となった。政府からの復興金10万ルピーも受けられる。
- ③海岸線100mの外に土地があるので、全壊した家の復興にかかった家族:
C.P.I.からの全壊復興救援 25万ルピーの対象となった。政府の復興金10万ルピーも受けられる。
- ④海岸線100mの外に土地があるので、半壊した家の復興にかかった家族:
C.P.I.からの半壊復興救援 5万ルピーの対象となった。政府の復興金10万ルピーも受けられる。
- ⑤家財道具の消失被災にあった家族:C.P.I.からの家財救援の対象となった。政府からの支援はない。

救援地域のインフラの状況

(東海岸については、より時間をかけて調査したい地域なので、今回の報告から省きます)

■アフンガラ地域

(地域全域で電気は復興しており、トイレもほぼ問題なかった。)

Garboka 部落＝給水タンクは現在4基ある。

Egodamula部落＝給水タンクは現在5基ある。

Maraduna 部落＝給水は、お寺の井戸から。

Makubura 部落＝給水タンクは現在1基ある。

Barapitiya 部落＝給水は、お寺の井戸から。

トイレは、サルボダヤ団体が復興して建てている。

Thotawatha 部落＝給水タンクは現在2基ある。

Afungalla 部落＝給水タンクは現在3基ある。



■タンガール地域

スリランカのNGOが仮設住宅を建てている。電気はあるがトイレは不便。

■カルタラ地域

日本政府が援助して仮設住宅を建てた。電気・トイレともに問題ない。

シャーニカ (No. 3775 女性、Garboka 部落、C. P. I. 救援対象②)

当初に復興費として政府から5000ルピーをもらい、食事材料を毎月支給された。

被災の二日後に、フランスのNGO(カシ ブンダ)が、部落の人々のために仮設ハウスを40棟建て、そのひとつに両親と3姉妹とともに住むことができた。

木造で、屋根には、やし葉のロール(1枚50Rs)15枚。人々の話では、家の材料費は4万ルピーほどとのこと。職人がフランスから大勢来て、建て終えたら撤収したそうだ。

海外線から100m以内にいるので、移るときは政府から土地がもらえるはず(長く決定を待たされている気持ちが出ていた)。

シャーニカは、水で膨れあがりボロボロになった教科書を、「この被災を忘れないために、とっておく」と言った。



ニローシャ (No. 4056 女性、Garboka 部落、C. P. I. 救援対象③)

政府からの援助金の半分で、壊れた部屋を建てなおし始めた。この写真では、どこも壊れていないように見えるかもしれない。右手の奥の部屋はすっかりなくなっていて、現在はそこを建てている。また、内部は壁もドアもなくなっていた。

「津波は家の中を通過してすべて流していった。家は外壁だけ」。

C. P. I. からの救援金通知をもらったので、「計画を変えて、きちんとした家にできそうだ」ということで家族の皆が顔をくしゃくしゃにして喜んでくれた。



プラマール(No. 5005 男性、Egodamula 部落、C. P. I. 救援対象④)

プラマールの親の兄弟と3家族が、一軒の家に同居なので、家族の住環境は非常に狭く(3畳間ほどに4名が寝泊り)不衛生。

トイレとキッチンが壊れていて、修理したいということだった。プラマール君は地域センターで里子たちのリーダー的な存在。

住んでいる環境からは想像できないほどの意志の強さで、「将来は、ほかの貧しい人たちのために働きたい」と差し出された手を、しっかりと握って別れた。



イシャニ(No. 5382 男性、Egodamula 部落、C. P. I. 救援対象④)

父親が心臓の病気で働けない。家の部屋のドア、壁など破壊されていた。

イシャニは、見たからに優秀な顔つき。数学の成績が抜群。数学オリンピックへの参加を促してみた。

世界基準の公的な資格を得ることは、高い収入を得る道に繋がると思う。彼自身、そのような機会があることを知らなかった。もったいないことだ。

これからは、そのような資格への挑戦の機会を、どんどん与えていけるケアシステムを築きたいと思う。



ニルーカ(No. 5639 女性、Egodamula 部落、C. P. I. 救援対象④)

津波が家の奥半分を、切り取ったように運び去った。700,000ルピー(60万円)で新築するとのこと。材料を買って、家族が左官仕事をして建てていた。

ニルーカの話では、「寝ていたら、その上を津波が通って、屋根や壁を持っていった。そのまま寝ていたら、また津波が来て、残ったものも運んでいった」とのことだ。

「でも、生きているから、ラッキーよ!」、
「生き残ったんだから、わたし、絶対に幸せになるのよ」と、いかにも <強気のニルーカ>らしい言葉ではあったが…、
「里親さんの思い出の写真がなくなったことが悔しい」とも。



プラディーパ(No. 5381 女性、Egodamula 部落、C. P. I. 救援対象⑤)

海のごく近く(30mほど)に家がある。それなのに、運よく家が数メートル高い所にあったため、家は壊れなかった。家財の被害のみですんで、「神様が守ってくださった」と言う。

景色もよく、涼しい住環境で、モニタリング担当者一同は、「いいところだなあ、羨ましいなあ、ここに住みたいなあ。」と、ひたすら住み心地のよさに感動。

住居のある高台を支える石垣は、父親が苦労して積んだという。「家業である漁業道具に援助をいただけて、有難うございます」と、お母さんとともに感謝された。



プレシカ (No. 5008 女性、Maraduna 部落、C. P. I. 救援対象⑤)

彼女の家族は、もともと借家に住んでいた。いまも借家だ。今回、プレシカの才能を認めてくれていた地元の有力者が、家族の家の面倒をみてくれることになった。

C. P. I. としては家財救援のみを行うことにした。
(プレシカの家に行ったとき、彼女は補習クラスに出たあとで、親も出かけていて、会えなかった。残念。)



カンチャナ (No. 5637 女性、Makubura 部落、C. P. I. 救援対象④)

津波で家を無くしたので、レンタルしている。3000Rs/月。この地域としては、なかなかの価格。カンチャナの兄さんが出している。

津波被災を機会に、兄さんの勤務先の会社(外国の会社)から、「土地があれば、家を建ててあげましょう」と申し出があった。そこで、C. P. I. としては、土地を買う代金を「家の損壊救援」の代わりに、補助することにした。



カスン (No. 5636 男性、Barapitiya 部落、C. P. I. 救援対象⑤)

父親はバッチカローワ(東部)で単身、漁師をしていたが、ゲリラの攻撃が激しくて廃業し、粉挽き業に転業した。

設備がそろったところに津波にあい、使い物にならなくなった。

家は借家で、損壊はない。従って、粉挽き業の設備救援を行うことになった。



ナディシヤ (No. 4638 男性、Thotawatha 部落、C. P. I. 救援対象⑤)

津波のとき、近くの親戚の家だったので助かった。もともと住んでいた借家は損壊したので、新しく借家を変った。一ヶ月2000ルピーの家だが、なかなか良い。

ナディシヤは、OL試験も抜群の成績で合格し建築が好きだという。近所の子の復興建築を手伝っていた。

家族には、家財の損失のみを救援することとなった。



ニシャーニ (No. 5009 女性、Afungalla 部落、C. P. I. 救援対象⑤)

父親は学校の宿舎料理人。すぐに職にもどれたと言っている。

周囲の家では、半壊した家もある中で、幸運な方だろう。家財の損失のみを救援することとなった。

近隣の家を見て回り、インタビューも行ったが、驚いたことには、ほとんどの家が復興建築を行っていた。



マノーリ (No. 4650 女性、タンガラ地域、C. P. I. 救援対象②)

彼女の家族の元の家は、海岸線100m以内にあった。
現在は、スリランカの救援NGOが建てた家に住んでいる。

部屋はふたつあるが、台所はない。トイレも水浴び所もないので、他の家の場所を借りている状態。

父親は猟師だったが、眼が悪くその職を続けることはできない。

C. P. I. と政府の復興救援金で家の建築ができると喜んで
いた。



家族の元の家は、海岸線100m以内にあった。
跡形もない

シャミラ (No. 5188 女性、カルタラ地域、C. P. I. 救援対象①)

家族の元の家は、海岸線100m以内にあった。日本政府の援助による仮設住宅でひと家族に割り振られた部屋は、4畳半くらいがふたつ。米、小麦粉、砂糖は、政府から支給される。

お母さんは、水汲みや団体生活の精神的疲労から体が痛いとのこと。

収入は、レンジをローンで買ってケーキを作って売っている。一個20ルピア、月に2000ルピーになる。

シャミラだけは、勉強するために、おばあちゃんの家にも宿した。

彼女が書いた「津波被災を忘れないために」という報告書が、SNECCの図書室に置かれることになった。

「土地が決まれば家を建てられるので、建築費を戴けることは、とても嬉しいです」と話してくれた。



カルタラ難民キャンプの仮設住宅。
一棟に4家族

《モニタリングを終えて》

小西(記)

罹災してから約9ヶ月。衛生面その他、復興の意外な速さに安堵した。

人々は、国際社会の多くの人たちの温かい支援を、きっと一生忘れないだろう。

ところで、各地を周って見て、お母さんたちがセメントをこね運んでいる現場にずいぶん遭遇した。「すごいなあ」と思うが、聞いてみると皆「腰が痛いけれど平気」と話す。

「なにしろ、ちゃんと住めなくては…。家庭を守るのは私の役目だからね」と異口同音のように聞かされた。

そして感心したのは、男の子たちだ。スリランカでは(日本でもその傾向があるが)、10代のころは女子のほうがしっかりしているように見える。ところが、津波地域の男の子たちは、一様にたくましかった。部落の建て直しのために一役買って出ている様子があった。

津波災害がスリランカ社会を変える予感がするのだが。



セメントを運ぶニローカの母親



津波を忘れないためにと、ボロボロの教科書をとっておいいたシャーニカ親子

多くの里親さんに助けられて……

恩返しは母国に帰って「日本語を教えたい」

元里子・サジーワニーさん、京都で講演

皆さんお世話になりました

サジーワニー・ディサナーヤカ

みなさんこんにちは。17年前、中学三年生だった私はスリランカの女子学校で学んでおりました。その頃スリランカ日本教育文化センターがスリランカのコーッテにあって、私にもそのセンターから私の学校に連絡があり、1989年から援助をして頂きました。

スリランカ日本教育文化センターは、スリランカのウダガマ・スマンガラさんというお坊さんが中心になって始めた教育文化交流の機関でした。1986年に貧しいけど成績の良い学生に対して、日本の方々の協力で奨学金を出すプログラムが始まったのです。

その頃、私は父、母、祖父、祖母と姉の6人家族でした。私は子供の頃から一生懸命勉強して小学校の卒業試験に合格し、田舎からコロンボの有名な女子校に入学することができました。その頃、父も母も仕事がなく、他の家の畑仕事を手伝っていました。しかし私と姉にはしっかり勉強させてくれました。コロンボで勉強する事は当時貧しかった家庭では大変なことでした。とても貧しい暮らしをしていた私にとって、1989年は忘れられない年になりました。それはC P I から奨学金を頂いた年だからです。何年間も雨が降らなかった砂漠に急に降り出した恵の雨のようでした。

その日から私の学生生活は明るいものになりました。私は以前よりもっと勉強に打ち込みました。私は C P I 奨学生として一生懸命勉強しました。外国語も初めて勉強でき、とても楽しかったです。私が高校を卒業するまで、毎年 C P I の里親さん達がスリランカにいらっしゃって、大きい奨学金授与式がありました。その中で私が強く感じていた事は、里親の皆さんが、実の子供ではない他国の子供達を、本当の子供のように愛し、助けてくださった事です。里親さんが自分の里子と会った時、お別れの時に心から涙が出されたのを見て、私も泣いてしまいました。私も私の里親さんを自分の父母と同じように愛していました。いつか私の里親



さんもスリランカにいらっしゃると思って、お待ちしておりますが、スリランカで会うことはできませんでした。でも私は時間がある時はいつも里親さんに手紙を書きました。お忙しいところ私の里親さんから時々返事がありました。

その手紙はとてもうれしかったです。

奨学金制度のおかげで私に他の日本人の先生方、里親さん、お友達が出来た事もとてもうれしいことです。なぜかという私の里親さんがスリランカにいらっしゃらなくても、毎年スリランカにいらっしゃった日下先生のようなとても親切な先生方とお会いすることができたからです。そのことも一生忘れることは出来ません。

毎週日曜日の朝、センターのお寺で日曜学校がありました。それが終わってから日本語のクラスが始まります。そのクラスで毎週休まず勉強した私は、高校でも日本語のクラスを選び、卒業試験をいい成績で合格できました。その後、スリランカのケラニヤ大学の人文学部現代言語学科に入学することができました。大学で日本語、中国語、英語、そして言語学を三年間勉強し、卒業しました。大学在学中の1997年からコロンボで一番大きい男子校、ロイヤルカレッジの日本語教師になりました。その学校で一年に一回「日本語の日」というお祭りが行われました。学校の生徒が日本語で歌ったり、おどったりして、色々な活動をします。ある日、私の生徒が「日本語の日」のため歌を練習していたところ、日下先生方がロイヤルカレッジにいらっしゃいまして色々教えてくださいました。私は、学校にはゆかたや着物はないけど、私は生徒達にゆかたとかを着せてドラマやダンスをやりたいと考えていたところでした。そのことを日下先生方に相談すると、すぐに日本にいらっ

しやる吉田友子さんというお友達に連絡して、私にゆかたを送ってくださったのでした。日本の方々のやさしさがよくわかりました。

又、スリランカ日本大使館の関係で、スリランカで続けている日本語学校でも私は日本語を教えていました。いつも私は子供のとき日本語を勉強したことを思い出しながら、生徒達に日本語を教えるのが楽しくてすごく楽しかったです。

三年後、2003年に国際交流基金の奨学金を頂いて、スリランカの日本語教育者の代表としてはじめて日本に来ました。それは私の人生でもらった二番目のチャンスでした。その奨学金もとても役に立ちました。そのプログラムは東京ではなく、広島、大阪、京都、鳥取に行ったり、大学の色々な活動に参加できました。その時は短期プログラムだったので、いつか日本に来てもっともっと日本語と日本文化について勉強したいという夢を持ちました。でもスリランカからどうやって日本に来るか、どうやって日本の大学に入学するか、どのように飛行機代や学費や生活費を捻出するか、毎日悩んでいました。

スリランカの大学で日本語を勉強しても、そのあと日本語を勉強するところはありません。設備も足りないし、日本人の先生もあまりいません。大学まで日本語を勉強した私としては、それ以上に日本文化も勉強して修士課程に進学したいという夢も考えていました。スリランカより物価が高い日本に留学する夢をどうやってかなえるか考えて眠れない日がいっぱいありました。

その後良い夫ができ、結婚しました。そして2003年5月頃、八王子にいる日本の方が私に招待状と飛行機代を下さり、日本に来ることができました。そして千葉県にある明海大学に入学できました。明海大学の日本語学科で日本語と日本文化を学ぶことができました。スリランカでは日本語を勉強するための日本語で書かれた本も足りないし、参考書も全然ありませんでした。そしてスリランカで勉強した中で間違えていたところもいっぱい直してもらったことも出来ました。明海大学で一年半ほど研究生として日本文化を勉強しました。その後、せっかく日本に留学したのだから、どうやっても大学の学部に入りたいという気持ちが強くなり、日本のいろいろな大学を調べ、今年4月に国立千葉大学に入学することができました。それはとても大変でした。なぜかと言いますと、日本で国立大学



講演するサジーワニーさん。左：夫メルピンさん。右：吉田友子さん

に入学するのはすごく難しいと日本人の先生方も友達も私に言ったからです。日本の私の先生方のおかげで、千葉大学に入学できた私は、今から大学院生になるために準備しております。千葉大学の文学部日本文化学科で「外国人とのコミュニケーション行動に関する日本人の挨拶」について研究しています。

私は大学院で勉強した後、母国に帰国しスリランカの日本語教育のために力になりたいと思っています。日本とスリランカの関係がもっとよくなるように貢献していくつもりです。私は日本における経験を駆使し、出来るだけスリランカにおける日本語教育に役に立たなければならないと思っています。

私が子供のころとても貧しい生活をしながらここまで歩いてきた道は、今後もっと明るくなるはずと思っています。ですから日本語の勉強の大切さをスリランカで勉強しているみんなに是非教えてあげたいです。

そして日本の里親さん、知人、日本人の先生方、友人達にはいつも感謝しています。私のような生徒はスリランカにたくさんいます。その生徒達に伝えたいことがあります。日本の里親さんも一生懸命お仕事をなさってスリランカにいる里子達の勉強のために大切なお金をかけてくださいます。里親さんみなさんの願いはそのお金で里子達が一生懸命勉強して、自分たちの将来を明るいものにしていくことです。ですから里子達みんなは奨学金を得ることが一番大事なのではなく、その大切な奨学金のことをよく理解し、一生懸命勉強することがなにより重要なのです。

最後に、このような素晴らしい会議に招待して頂き、どうもありがとうございました。

サジーワニーさんのこの原稿は7月10日、C P I 関西連絡協議会の総会でお話してもらったものです。



SNECC本館

里子の生活調査をします

全国を巡回調査し、適切な指導をし、支援方法を決めます。

C. P. I. とSNECCの活動の特徴は、教育里子が脱落しないように努力していることです。

毎年10月に各地で親子面談をしますが、今年は少し早めに9月20日から、全国の奨学生調査を開始しました。10月15日までに巡回を終えます。

その後、C. P. I. から「特に深い調査」の依頼あった子ども家庭に聞き取り調査を行います。

それから、教育里子の援助継続あるいは打ち切りの決定、データのチェックと日本語翻訳を、C. P. I. の小西会長がSNECCスタッフとともに行き、C. P. I. の教育里親さんに送ります。

今年は、この作業をすべて、スリランカ内で行うことになっています。

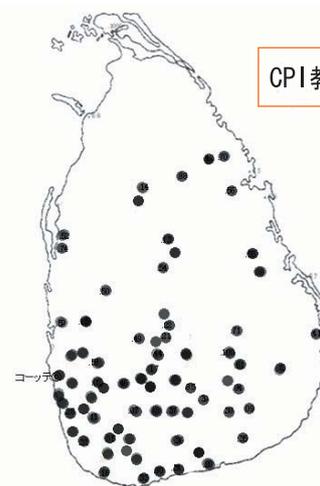
長年の問題は、この「とくに深い調査」の報告が上手くいかなかったことです。それを解決するために、今年9月から「地域アシスタント制度」を始めました。数年先には、相当に改善できると思います。

新しいやり方を円滑にするために、C. P. I. から小西会長が、SNECCで指導することになりました。

C. P. I とSNECCについての『豆知識(1)』

首都コッテにある本館施設は、1992年11月に『SNECC本部とC. P. I. 本部の共同施設』として、覚書が交わされ、1993年に竣工されました。

また、SNECCの地区センターは全国に112箇所あり、その内C. P. I. の教育里子は90ヶ所の地域にあります。



CPI教育里親の支援地域

C. P. I とSNECCについての『豆知識(2)』

